巻頭エッセイ

進む情報化の中で思う事

小川　隆
日立建機日本株式会社
常務取締役

先日、都内でインプラントの手術を受けて来ました。欠損した歯のあった部位に義歯を土台から埋め込み元の歯と同じ状態を作りあげるものです。私の場合は奥歯が四本欠損していたので、土の中にパイルを打ち込むのと同じ作業を口内で四箇所行うというものです。人ごとではないので名医と言われる方をお客様からご紹介して頂きました。事前の検査に向かう前はかなり不安でしたがMRIで撮影した３D画像で私の歯や顎の骨の状態をあらゆる角度から見せて頂き、どの場所にどの位の長さの基礎をどの斜度で入れるかをコンマミリ単位の表示で説明して頂き、安心して手術して頂く気になりました。手術当日も直前に３Dで情報化された画面で丁寧に説明して頂き、いざ手術ということになりましたが、では、そのまま横になって下さいと言われた時「先生、この画像は見るだけですか」と質問すると、そうですとの事で後は即かつスムーズに手術は一時間程で完了しました。直前に質問しても遅かったのですが、先進的な機器で得られたデータを参考に手術は熟練した匠の技で行うというものでした。医学の分野では高度に発達した機器を用いて今まで不可能だった検査や手術が飛躍的に進んでいる分野ですがその中でも専門的な経験を積んで発達した機器を使いこなす人の役割が根幹にあります。

現在、建設業界では情報化施工が国の指導で推進されています。ICT（情報通信技術）を使ってブルドーザや油圧ショベルなどの建設機械の位置情報と三次元設計データを用いて操作するオペレータにモニターで設計形状を知らせたり（マシンガイダンス）、作業操作を自動制御（マシンコントロール）してそれによって従来必要とされてきた丁張や施工中の測量による確認作業などを大幅に削減しようとするものです。それによって費用と工期を短縮して、経験の浅いオペレータでもミスの無い作業が安全に出来る様になる事を目指しています。しかしコントロールされる機械のレベルは完全な自動化にはまだ時間が掛り熟練したオペレータの存在は貴重です。海洋土木の分野も天気や気象条件から大きな制約を受ける極めて厳しい作業条件から、これまでも様々な作業船や搭載する機械の発達は相当に進められてきました。過酷な作業環境ゆえ安全や効率を求める情報化施工や自動化の流れはもっとも訴求される業界であると思います。

私は学校も文系で年齢的にもテレビゲームやOA機器と無縁な青春時代を過ごして来ましたが、今では携帯電話（スマホ）や車のカーナビは人並みに欠かせません。でもそのお陰で他人の電話番号や道順なんてまったく自分の脳の記憶に残らなくなりました。結婚してから料理や洗濯、諸々の家の用事もすっかり女房任せで身に付いていません。人は皆便利になる一方で片方は退化してしまう、あるものを得るとあるものを失う、人間とは多分そういうものなのでしょう。

日本の領海と世界６位と言われるEEZ（排他的経済水域）にはメタンハイドレートやレアメタルといった豊富な地下資源が眠っているといわれています。一方でこれまで日本は資源に乏しく自然環境が厳しいからこそ、忍耐や辛抱、仲間への思いやりや創意工夫の素養が発達し、国もそれを教育の充実で支え人材を育成してそれが現在の国家の地位を築いてきたと言われています。資源大国と言われる、中東、中南米、ロシアなどとはおかれた環境からまったく違う生き方をしてきました。持たざるがゆえに独自の進化を遂げてきたとでも言えるでしょう。今は商業ベースに乗らないと言われている海洋資源も機械の進化などが伴って工夫次第で活用されるとなるとそれによって国柄や国民性も変わって行くのかもしれません。

企業は人なり、という言葉が有るように、人材の育成は企業の最重要課題でそれが国民のレベルを上げる事にも結びついていると思います。先ほどの情報化施工に対応する機械を使う事など変化する環境に対応して開発された機器や道具をその程度に応じて使いこなす為の教育や訓練も必要なことでしょう。しかしまたそういった事と同時にあるいは別の次元で人としての普遍的な価値や倫理観などを確かなものにしていく事が企業の人材育成の根本あるべきと思います。但し今はあまりに多様で膨大な情報に溢れていて忙し過ぎる気もします。先日、ある人の文章に「至誠惻怛」（しせいそくだつ）という言葉がありました。誠を尽くしいたわりの心を持って人に接するという意味だそうですが、そういった心持ちが我々にまずは今、必要なのかもしれないとも思っています。